

# 鎌倉時代に制作された横笛 仏像胎内に納入された 三例を中心に

著者	高桑 いづみ, 野川 美穂子
雑誌名	芸能の科学
号	31
ページ	1-24
発行年	2004-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00003089/">http://id.nii.ac.jp/1440/00003089/</a>

# 鎌倉時代に制作された横笛

—— 仏像胎内に納入された三例を中心に ——

高 桑  
野 川  
美穂子

いづみ

はじめに

一 安国寺阿弥陀三尊像の胎内納入龍笛

二 寂光院地藏菩薩像の胎内納入笛

まとめ

## はじめに

管楽器、ことに笛の調査はむずかしい。

一つは制作年代の問題である。いつ制作されたものなのか、情報を楽器に記すことができないので、由緒書きがあるものはその文書にしたがって制作年代を推定したり、外見の劣化の度合いで判断せざるを得ない。劣化が激しければ平安や鎌倉時代の作ということになるのだが、劣化の具合によっては楽器表面の樺を巻き直すなど修理をしてしまいうから、劣化がなさそうに見えても時代が新しいとは断定できない。

今一つの問題は、ピッチである。楽器を歴史上の文化遺産として扱う以上、実際に歌口に口を付けて吹奏するのはむずかしい。従って、どのような音高や音色で演奏されていたか、指孔の位置から推測するしかないのである。

そのような状況下で、制作年代を限定できる横笛が三点ある。いずれも鎌倉時代に制作された仏像（広島県福山市安国寺の阿弥陀三尊像、京都市寂光院の地藏菩薩像、京都市清涼寺の地藏菩薩像）の胎内に納められ、仏像というタムカプセルの中で六百年余り、だれの手にもふれられることもなく時を過ごし、今の世に姿を現した笛である。六百年の眠りから目覚めてみると、三点とも現在使用されている横笛とは製法やサイズが異なっていた。巨視的にみると、正倉院に伝来する横笛と現行の横笛の間に位置づけることができよう。このうち安国寺蔵の笛については平成十四年十一月と平成十五年十二月に調査をおこない、所蔵者等の許可をいただいて音高データを得ることができた。また、平成十五年十二月の調査では横笛制作者の田中敏長氏・大橋彩子氏から有益な知見もいただいた。寂光院蔵の笛については平成十五年十月に調査をおこない、これに関連して、平成十五年七月と平成十六年三月には、多賀城市埋蔵文化財調査センターで、出土した横笛の調査を行った。これらの調査を元に、笛の形態変遷史への序論を展開すること

としたい。

## 一 安国寺阿弥陀三尊像の胎内納入龍笛

### 安国寺

安国寺は法燈国師を開山とする臨済宗の寺院で、広島県福山市鞆の浦に位置している。鞆の浦は古くから海上交通の要所として栄えた港町で、江戸時代には朝鮮通信使の寄港地としても知られている。現在でも多くの寺院が残り、往時の繁栄をうかがうことができるのだが、安国寺は文永十年（一二七三）に「金宝寺」という名で建立された。安国寺と名を改めたのは室町時代、と記録に書かれている。

本尊の阿弥陀三尊像は一・七メートル、光背を含めると三メートル以上にもなる大きな仏像（図1）で、昭和二四年に解体修理を行った際に、胎内からさまざまな納入品が発見された<sup>①</sup>。まず像内の墨書から、仏像の造立年代が確定した。文永十一年に平頼影を檀那とし、空蔵房寛覚が勧進僧となつてさまざまな階級の人に勧進を募つて阿弥陀三尊像を安置した、と書かれていたのである。納入品の中に十八歳の青年僧覚鑊が自分の血で認めた阿弥陀経が一卷納められていたが、文永十一年はまさに元寇の年である。勝利祈願を籠めて、経文を納めたのであろう。その他、念仏帳や袈裟などと一緒に龍笛が発見された（図2）。龍笛は、穴を開けた板に短刀と一緒に差し込まれていた（図3）。仏像の胎内に経文や願書を納めることはあっても、刀剣や笛を納めた例は珍しい。平安時代も後期になると、仏像への結縁の意味で愛用品を喜捨するようになるので、この笛も施主平頼影の捨物だったのかもしれないが、この人物についての来歴は全くわからない。中に納められた勧進帳にも龍笛についての言及はなく、だが、何のために納めたのかは不明である。ちなみに納入品はすべて重要文化財に指定されている。

## 笛の概要

阿弥陀像の造立は文永十一年だが、その後内部を開けた形跡がないので、笛の納入は像の造立時、と考えられる。笛の制作は遅くとも鎌倉時代前期、ということになる。歌口や指の当たる部分にほとんどスレがないので、あまり吹奏されずに納められたらしい。指孔部分に白く付着したものが補修材のようにも見えた(図4)が、スレやすい箇所が付着しているわけでもない。胎内に納められていた間に付着したか、竹そのものの成分が染み出してきたかのいずれかであろう。表面に施された漆の色も一様で部分的に補修した様子も見えず、樺(これについては後述する)を巻き直した形跡もないことから、吹奏頻度が高かったとは考えにくい。ただし、歌口と節との間には蜜蝋が残っているので吹奏したことはあったらしい。

この笛は全長四〇・七センチ、頭径二・三センチで、現在使用されている龍笛とほとんど同じ法量(表1)だが、製法の点でさまざまな相違点がある。それを一つずつ検討することにしよう。

田中・大橋両氏のご教示によると、<sup>③</sup>素材となった竹は真竹らしい。管尻を見ると、かなり肉厚で、節の部分が太くはつきりとした雄竹を用いている。現在では頭部は雄竹、歌口より下の部分は雌竹を用い、途中で継ぐことが多いそうだが、この笛の裏側を見ると、小枝を除去した跡が歌口より下まで走っている(図5)。別材を継ぐことなく、一本の竹で作成したようだ。

外観を見てまず気付くのが、指孔、歌口の部分で谷ぐりをしていない点である。現在では指孔と歌口部分の竹の表皮をそいで削っており、これを谷ぐりと言う。「音をやわらかくするためと持ちやすくするため」などと記した解説書もあるが、<sup>④</sup>この説の信憑性は定かではない。これが、現在の製法と異なる第一の点である。

管の中は、砥ノ粉と漆をあわせた「下地」を塗って均等な面をつくるのだが、この笛ではそれもない。肉厚の竹を素材としたために、下地を塗る必要がなかったのである。

表 1 安国寺の龍笛の法量表

安 国 寺				三の丸「朝日丸」				東 博 (法隆寺献納宝物)		正倉院 (班竹)	
全 長		40.7		40.1		39.8		39.2			
節までの長さ		4.6		4.3				3.1			
頭部端	外径	2.3		2.2		2.2		2.4			
	内径	1.3		1.4		1.5					
管 尻	外径	2.1		2.1		1.9		2.25			
	内径	1.1		1.2		1.3		1.75			
最大径		2.7		2.7		2.7					
		左端まで	孔の径	管の外径	左端まで	孔の径	管の外径	左端まで	孔の径	左端まで	孔の径
歌 口		11.2	1.7	2.4	11.2	1.6	2.1	10.5	1.6	8.35	1.15
第 1 指 孔		23.1	1.3	2.3	22.9	1.1	1.9	22.5	1.3	20.7	0.96
第 2 指 孔		25.6	1.2	2.3	25.4	1.2	1.9	25.0	1.2	23.4	0.95
第 3 指 孔		28.0	1.2	2.3	27.8	1.2	1.9	27.4	1.2	25.8	0.93
第 4 指 孔		30.1	1.2	2.2	30.0	1.0	1.8	29.6	1.3	28.1	0.9
第 5 指 孔		32.2	1.2	2.2	31.9	1.1	1.8	31.8	1.1	30.4	0.9
第 6 指 孔		34.3	1.2	2.2	34.1	1.0	1.8	33.8	1.1	32.6	0.88
第 7 指 孔		36.1	1.1	2.2	36.0	0.9	1.8	35.6	1.1	34.7	0.85

(備考 1) 単位は cm。「節までの長さ」は、頭部端から節の端 (頭部側) までの距離。「左端まで」は頭部端から各孔までの距離。「孔の径」は管頭から管尻に向かう方向の孔の幅。「管の外径」は孔の中心位置における管の外径。

(備考 2) 比較のため、三の丸尚蔵館蔵「朝日丸」(伝：平安時代)、東京国立博物館蔵の龍笛 (法隆寺献納宝物)、正倉院蔵の横笛 (班竹) の値も掲載した。「朝日丸」の値は、「古楽器の形態と音色に関する総合研究」(研究代表者 高桑いつる、平成 13～15 年度科学研究費補助金 基盤研究 C2 課題番号 13610064) の報告書による。「東博 (法隆寺献納宝物)」の値は、『法隆寺献納宝物特別調査概報 XIV 楽器』(東京国立博物館、平成 6 年) による。「正倉院 (班竹)」の値は、『正倉院の楽器』(日本経済新聞社、昭和 42 年) による。

また、管の表面には樺巻といって糸状に割いた桜の皮（樺）を巻き、その上から漆を塗るのが現在の製法だが、この龍笛ではそれも異なる。通常、経木で下地を作った上に樺を巻くのでその部分だけの厚さになるのだが、この笛は厚みがなく一様に平たい。調査の結果、樺の代わりに麻糸状のものを巻き、その上に透漆をかけただけであることが判明した（図6）。厚みから判断すると、経木などの下地もおそらくない。樺巻については、『続教訓鈔』<sup>⑤</sup>第十二冊に「本結丸ハ、カハ（注・樺）ノトケタリケル所ヲ、紫ノ糸ヲマカレタリケレハ、本結丸ト御定アリケル也」という記述がある。鎌倉時代でも樺を巻くのが正式で、糸で巻くのは略式だったようだが、後述するように糸で巻いただけの横笛は他でも散見する。それほど特殊ではなかったらしい。

セミの形状も変わっている。節から出ている小枝を除去した跡にセミ、と呼ばれる装飾をつけるのだが、通常見かけるのは別材（唐木）を埋め込んで蟬の形に成形したものである（図7）。正倉院には小枝を残した横笛が伝来している（図8）が、数本並んで付いている小枝が木に止まった蟬を連想させるのでセミと呼ばれるようになった、と言われている。音色や響きとは直接関係ないのだが、この正倉院の笛を模倣した竹生島伝来の笛（伝室町時代・彦根城博物館蔵・図9）もあるほどで、装飾としてこだわりのあったらしい。だがこの笛は別材を埋め込まず、小枝を除去しただけのシンプルな姿を留めている。別材で埋める製法が定着する以前は、小枝を除去するだけで特別な細工をせず、むしろ自然の風合いを楽しんだのだろう。これも他に同様の例があるので、後で報告したい。

ここで、安国寺龍笛の製法上の特徴をまとめてみよう。

- ア 谷ぐりをしていない
- イ 管内に下地漆を塗っていない
- ウ 樺を巻かず、麻糸を巻いた上に漆を塗る
- エ 竹の節跡を利用したセミ



現在、ふつうに見かける龍笛とはかなり製法が異なるわけだが、こうした製法は、鎌倉時代にはそう特殊ではなかったらしい。

### 「はまつと」「斑鳩丸」

この龍笛と製法の近いものを紹介しよう。

まずは東京国立博物館が所蔵する「はまつと」である(図10)。博物館の目録では鎌倉時代の作と書かれているが、根拠は不明である。歌口に朱を塗るなど補修の跡が見られるが、指孔や歌口の谷ぐりをせず、樺ではなく糸を巻いた点は安国寺の笛と同じである。この笛は漆を塗った部分に厚みがないので、従来平樺巻だと言われてきた。糸状に裂いた樺ではなく、やや広めに切った樺を重ねて巻いた、と考えられていたのである。しかし、歌口から第一指孔にかけて漆地の下に麻糸が見える(図11)。少なくとも歌口から下方は下地を施さず、糸を巻いた上を漆で塗り固めただけだったのである。歌口より頭部よりの部分は漆で補修した跡があるので判断しにくい<sup>6</sup>が、同じような外見を持つ石上神宮蔵の横笛(伝室町時代)も、糸を巻いた上に漆を直に塗っていた(図12)。全体を通して糸が巻いてある、と判断してよからう。

彦根城博物館蔵の「斑鳩丸」も、同じような製法によっている(図13)。この笛も漆塗布部分に厚みがなく、何ヶ所も細かい剥落がある。剥落跡の白い表面を見ると樺を巻いたようには見えず、糸を巻いたようだ(図14)。同館蔵の『楽器類留』には「あこめ巻」と書かれている<sup>6</sup>。これがなにを意味するのか不明だが、常の樺巻きではないという意識がうかがえよう。もちろん谷ぐりはしていない。

「はまつと」と「斑鳩丸」は、セミも変わっている。「斑鳩丸」は安国寺の笛同様、小枝を除去したままの状態(図15)だが、「はまつと」はセミの形態を思わせるような独自の形に、材を直接彫り込んでいる(図16)。

年代が限定できるのは安国寺の笛だけだが、樺を巻かず、セミに別材を用いない笛は、それほど特殊ではなかったのである。

## セミ

安国寺の笛に関連して、変わった形態のセミを何点か見かけたので紹介したい。

東京国立博物館には神楽笛や高麗笛を含めて横笛が二十点ほど収蔵されている。全管を調査したわけではないが、「昌平丸」（伝室町時代・図17）・「占月丸」（伝鎌倉時代・図18）・「蘆田鶴」（伝室町時代・図19）は、別材を埋め込まない製法であった。ただし、小枝を除去した跡がおもしろい形に残るよう工夫が見られる。また、彦根城博物館の「花鳥丸」（伝平安時代後期）は、枝跡の虫食いを利用した独特の成形である。これらの笛では、すべて現行と同じように樺巻きが施されている。樺が当初のものか後補か判断はむずかしいが、樺巻きの有無にかかわらず、小枝を除去して別材を埋め込む製法はかなり後代の工夫と考えてよいように思う。たとえば彦根城博物館蔵の「讃竹丸」（伝平安時代後期）・「福原」（伝鎌倉時代）は別材を埋め込んで成形していたが、別材は年代がいかに新しい。後補は確実である。石上神宮の横笛も小枝を除去したままで、しかもその位置が歌口の裏ではなく横になっていた。セミに関してはさまざまなヴァリエーションがあったのである。

従来、「蟬折」などセミの形状で名の知られた笛がある。「蟬折」については天文二三年（一五五四）に洞院公賢が編集した『拾芥抄』に名器としてあがっており、『源平盛衰記』巻十五に「鳥羽院御時：中略：唐土ノ国王其御志ヲ感ジテ種々ノ重宝ヲ被報進ケル中ニ、漢竹一両節間被制タリ。竹ノ節生タリ蟬ニツユ不違ザリケレバ、希代ノ宝物ト思召：中略：鳥羽殿ニテ御賀ノ舞ノアリケルニ、閑院ノ一門ニ高松中納言実平此御笛ヲ給テ吹ケルガ、スキ声ノシケルヲアタ、メントテ、普通様ニ思ツ、膝ノ下ニ推カイテ、又取上吹ントシケルニ、笛咎メヤ思ケン、取ハツシテ落

振動数比較表

上 フ (g') セ (g'')	タ フ (a') セ (a'')	中 フ (b') セ (b'')	下 フ (c''・c''') セ (c'''・c''')	六 フ (d'') セ (d''')
787.6(g'+8) 1519.8(f <sup>#</sup> +46)	883.1(a'+6) 1666.0(g <sup>#</sup> +5)	999.8(b'+21) 1850.7(a <sup>#</sup> -13)	1135.3(c''+41)	1214.0(d''-43)
780.4(g'-8) 1523.3(f <sup>#</sup> +50)	872.9(a'-14) 1656.4(g <sup>#</sup> -5)	992.9(b'+9) 1850.7(a <sup>#</sup> -13)	1130.1(c''+33) 2190.7(c'''-21)	1172.0(d''-4)
636	706	798	885	963
622	694	786	871	961
772.3 1544	865.3 1668	984.9 1863	1110 2106	1160 2236

(備考3) 「安国寺 A」は平成14年11月調査時の録音、「安国寺 B」は平成15年12月調査時の録音による。比較のために示した「正倉院(班竹)」と「正倉院(呉竹)」は、『正倉院の楽器』(日本経済新聞社、昭和42年)に掲載された「横笛の振動数」(63ページ)の最上段の数値による。「東博(法隆寺献納宝物)」は、『法隆寺献納宝物特別調査概報XIV 楽器』(東京国立博物館、平成6年)に掲載された「献納宝物横笛と竜笛(2管)の振動数表」(79ページ)による。

シテ蟬ヲ打折ケリ。其ヨリシテ此笛ヲ蟬折トゾ名ケル、と由緒が書かれている。<sup>①</sup>竹の節が蟬の形態に似ていた、というのだから、別材で細工したのでないことは明らかである。『続教訓抄』には、「チキサヤカナル笛ノ、蟬三筋アザクトシテ付」いた「小蟬丸」、「昔蟬二碧鮮ノ二葉アリ、白露常ニ其上ニ凝ル、故ニ青葉ト号」した笛を紹介している。「蟬三筋」は節の筋数だろうし、「蟬二碧鮮ノ二葉」がついていたというのだから小枝をそのまま残していたのであろう。文献の上からも、別材での細工は後代にならないと確認できないのである。

## 音律

所蔵者の許可を得て吹奏し、安国寺の笛について音高データを得ることができた。吹奏に当たっては口の当たる角度が同じになるよう努めた。その結果は表2の通りである。音律の点で、現行の笛と大きく異なるところはない。正倉院に残る笛は筒音(「口」と「六」の音がオクターブ関係になっているのに対し、安国寺の笛は、現行の横笛と同様、筒音は「六」の一オクターブ下の音よりも低い。この音律の違いは、管長と指孔の位置に関係している。すなわち、正倉院に残る横笛の場合、それぞれ若干異なっている

表2 安国寺の龍笛の

	口 (c <sup>#</sup> )	次 (d <sup>#</sup> )	フ (e <sup>'</sup> ) セ (e <sup>''</sup> )	五フ (f <sup>'</sup> ・f <sup>#</sup> ) セ (f <sup>''</sup> ・f <sup>#</sup> )
安国寺 A	525.1(c <sup>'</sup> +6)	596.9(d <sup>'</sup> +28)	654.0(e <sup>'</sup> -14) 1302.6(e <sup>''</sup> -21)	710.3(f <sup>'</sup> +29) 1396.1(f <sup>''</sup> -1)
安国寺 B	515.5(c <sup>'</sup> -26)	586.0(d <sup>'</sup> -4)	641.2(e <sup>'</sup> -48) 1297.4(e <sup>''</sup> -28)	699.7(f <sup>'</sup> +3) 1388.9(f <sup>''</sup> -10)
正倉院 (斑竹)	469	512	548	598
正倉院 (呉竹)	467	508	537	576
東博 (法隆寺 献納宝物)	528.6	594.4	640.1 1310	698.1 1416

(備考1) 振動数の単位はHz。フはフクラ (同じ指孔を押さえて出す低音) の略。セはセメ (同じ指孔を押さえて出す高音) の略。

(備考2) 最上段に示した指使いには、目安として、近似する英米式の音名で現行の龍笛の音高 (『日本音楽大事典』平凡社、平成元年、322 ページ参照) を示した。安国寺の振動数については、比較の目安として、平均律 (a=440 Hz) との差を併記した。

のだが、おおよそ節から管尻までの中間点に第一指孔<sup>⑨</sup> (「六」) をうがち、歌口中央から管尻までの中間点に第二指孔 (「中」) をうがっている。ところが、安国寺の笛は、歌口中央から管尻までの中間点に第二指孔をうがっている点は同じであるが、第一指孔は、セミ部分の歌口側の端から管尻までの中間点にある。このプロポーシオンは現行の龍笛と同じである。筒音が「六」のオクターブ下の音より低くなった時期については、古譜の研究では、十三世紀末まで遡りうる事が指摘されているが、今回の調査によって、その時期を、安国寺の阿弥陀三尊像が造立された文永十一年 (一二七四) 以前と言えることになった。

二 寂光院地藏菩薩像の胎内納入笛

昭和六一年から平成元年にかけて、京都・寂光院の本尊地藏菩薩立像の解体修理がおこなわれ、多数の納入品の中から六孔の横笛が発見された<sup>⑬</sup>。一緒に納められていた願文から仏像の造立は寛喜元年 (一二二九)、安国寺の仏像より半世紀ばかり前に大原来迎院の僧寂如の発願による事が判明した。本尊は全高二五六・四センチ、檜材の寄木造りである (図20)。胎内からは五・五

表 3 寂光院の笛の法量表

全 長		残存 27.4		
節までの長さ		4.8		
頭部端	外径	1.4		
	内径	1.1		
管 尻	外径	1.3		
	内径	1.0		
		左端まで	孔の径	管の外径
歌 口		8.2	1.0	1.5
第 1 指 孔		17.0	0.8	1.4
第 2 指 孔		18.7	0.8	1.4
第 3 指 孔		20.2	0.8	1.38
第 4 指 孔		21.7	0.8	1.37
第 5 指 孔		23.1	0.8	1.35
第 6 指 孔		24.4	0.7	1.35

(備考) 単位は cm。「左端まで」は頭部端からの距離。「孔の径」は、管頭から管尻に向かう方向の孔の幅。「管の外径」は、孔の中心位置における管の外径。

十一・ハセンチの小さな地藏菩薩像が三四一六体も発見されたが、法華経などの經典類のほか、刀や連珠、香袋、唐・宋銭、真綿や綾裂が木箱に納められていた。納入品は重要文化財に指定されて一旦は像内に納められたが、平成十二年に菩薩像が焼損したため、現在では桐箱に納めて別置している。

笛は管尻が欠け、黒漆をわずかに残す状態で発見された(図21)。この笛で、まず驚くのはそのサイズである(表3)。管尻が欠けているが、全長は二七・四センチしかない。

現行の笛で六孔は神楽笛と高麗笛だが、神楽笛は四五センチ、高麗笛は三六センチ前後である。この笛はそれに比べると格段に小さいのだが、指孔の間隔もたいへん狭く、隙間なく指を置かないとふさぐことができない。当時の成人男性の身長は不明だが、現在の成人男性には吹奏がむずかしいのではなからうか。指孔や歌口が摩耗していないので、胎内に納めるために小型の笛を作成した可能性も考えられる。

製法をみてみよう。節の太い雄竹を用い、他の材を継がずに一管で成形している。谷ぐりはしていない。現在でも神楽笛や高麗笛では谷ぐりをしていないので、古制というよりその系統といえるかもしれない。頭部、歌口と指孔の間、指孔の間、管尻に黒漆が残っている(図22・23)が、これは下地であろう。この上に樺を巻いたのか糸を巻いたのか現状から判断はできないが、頭部に残る漆跡を見ると、経木などで下地を成形したとは考えにくい。また、歌口

の裏側は小枝を除去したままでセミと言える形状ではない(図24)が、節の筋が二本たいへん目立つ。『統教訓鈔』があげた「蟬三筋アザく」とした「小蟬丸」とは、このような笛を指していたのかもしれない。

### 清涼寺地藏菩薩の納入笛

この笛とほとんど同じ法量の笛が、清涼寺の地藏菩薩像にも納められていた。この地藏菩薩は全長六八・二センチ(図26)。檜の一木造りで寂光院にくらべるとかなり小型だが、背面を内割りして、内部に経典、香袋、連珠、扇、宋銭、真綿など、寂光院地藏菩薩とほとんど同じような品を納めていた。納入された願文から、延暦寺宝幢院の僧で嵯峨に隠遁した成円の発願で承久三年(一二二一)に造立されたことが判明した。寂光院と清涼寺の願文はほとんど同文で、両者とも「収妙色声等五境良薬」の一品として笛を納めたいらしい。五境とは仏教で説く万物の構成要素、色・声・香・味・触の五つを指す。『往生要集』では極楽浄土のさまを「無量の樂器ありて懸かに虚空に処まり、鼓たざるに自ら鳴りて、皆妙法を説く」と描写しているが、その記述に従い、極楽往生を願って笛を納入したらしい。昭和八年に解体修理をおこなった後納入品を胎内に戻してしまったので、現在では修理時に撮影した白黒写真と修理記録しかデータが残っていないが、一緒に写っている宋銭の大きさから推量すると、寂光院の笛とほとんど同じ寸法である(図25・28)。清涼寺の仏像は小型なので、その内割りに収まるよう小型の笛を納入したという事情が推測される(図27)が、清涼寺に遅れること八年経って造立された寂光院でも、清涼寺を模して小型の笛を納めたのであろう。笛の制作時期は寂光院の笛とほぼ同時期と考えられる。文献に記述のない小型の笛が、二管にふえたのである。

写真の明度が低いので樺巻き等外観の様子はわかりにくいのだが、経木などで下地を成形したようには見えない。第二指孔は歌口と管尻の中間点にあるように見える。このプロポーシオンを、管尻に欠損のある寂光院の笛にあてはめると、寂光院の笛の全長は二九・五センチ程度と推定できる。正倉院の笛と同じように、節から管尻までの中

間点に第一指孔があると考えれば、三〇センチ程度である。

小型の笛について、『統教訓鈔』におもしろい記述がある。

太笛モ、本ハ横笛ノ一越調ニ会ホトノ笛ニテソ侍リケル、此世ニハ今少シフトリニタリ、是等ハミナ哥ウタヒノ音トモノ、此世ニハ不足ナレハ、フトクナシタルトソ、此事ハ鳥羽院ノ御時ノ事也（『統教訓鈔』第十二冊）

昔ノ狛笛ハ、横笛ノ尻ヨリサシイレラル、ホトニ、チキサカリケリ、而ニ今ノ世ニハ、事ノ外ニ大ニナリタルナリ（『統教訓鈔』第十一冊）

かつての神楽笛（「太笛」）は『統教訓鈔』が書かれた時期の笛よりも細かった、高麗笛（「狛笛」）も「横笛ノ尻ヨリサシイレラル、ホトニ」小さかった、というのである。寂光院の笛を古制の高麗笛と推定したいところだが、現段階では断定を避けたい。次に述べるように、近年、地方の遺跡からさまざまな形態の笛が出土するようになり、中には寂光院と清涼寺の笛に近い法量の笛も発見されているからである。

## 音 律

寂光院の笛については、幸いなことに、重要文化財指定時に高橋美都氏（京都市立芸術大学伝統音楽研究センター助教）が吹奏した音が残っている。表4にその音のデータを示した。現在の横笛類では歌口と節との間に蜜蠟を詰めて吹くが、この笛の歌口付近には何も残っていなかった。歌口に何か詰め物をして吹奏したのか、あるいは節まで何も詰めずに吹奏したのかは確認できない。詰め物の有無によって、当然、音高や音色は変わってしまう。表に示したのは、詰め物があったと仮定し、紙礫を残す正倉院の笛にならない、紙を詰めて吹奏した値である。

全長が短く、管径も細いので、筒音は高い。 $g^{\#}$ （鳧鐘）に近い。高麗笛と比較してみると、たとえば「上」（下から三つの指孔を開ける）のフクラの音は、現行の高麗笛よりも短三度ほど高い音（ $c^{\flat}$ ・神仙）である。同じ指使いで

表4 寂光院の笛の振動数比較表

	筒音 フセ	下 フセ	五 フセ	上 フセ	タ フセ	中 フセ
寂光院	823.4( $g^{\sharp}-15$ ) 1490.3( $f^{\sharp}+12$ )	898.0( $a'+35$ ) 1582.5( $g''+16$ )	968.6( $h'-34$ ) 1645.9( $g^{\sharp}''-16$ )	1046.5( $c''$ ) 1711.9( $a''-48$ )	1133.3( $c^{\sharp}''+38$ ) 1794.9( $a''+34$ )	1241.6( $c^{\sharp}''-4$ ) 1901.6( $a^{\sharp}''+34$ )

(備考1) 振動数の単位はHz。フはフクラ(同じ指孔を押さえて出す低音)の略。セはセメ(同じ指孔を押さえて出す高音)の略。指使いの名称は、高麗笛に準じた。

(備考2) 比較のため、各振動数には平均律の音( $a=440$  Hz)との差も併記した。

息の強さを変えたフクラとセメでは、一オクターブ差になっていない。セメについては、順次に指を開けていった際の音程差が小さい。同じ指使いでも息を吹き入れる角度などによって音高に違いが生じるので、この数値を絶対的なものとみなすことはできないが、現行の高麗笛よりも音域が高い笛であることは確かである。

清涼寺の笛については、写真が唯一の資料であるため、音律はわからない。既述のように寂光院の笛と類似した法量とみなし得るので、同じような音高であった可能性がある。

### 出土した竹製の横笛との関係

過去の楽器を知る手掛かりには、伝世品、出土遺物、文献資料、図像資料など様々なものがあり、お互いに補完しあう情報となる。これは、仏像胎内に納入された笛の考察にもあてはまる。前述のように、寂光院の笛と清涼寺の笛は小型であった。どちらも仏像の胎内に納入されていたことから考えると、胎内の大きさに合わせたミニチュアであり、実用品ではなかったという推測もできよう。しかし、この二点に類似した大きさの横笛が出土遺物にある。考古学的な資料も含めて考えると、寂光院と清涼寺の小型の笛が実用されていた可能性も出てくるのである。

現在、古代および中世の遺跡から出土した竹製の横笛としては、表5に示した六例の報告がある。<sup>⑬</sup>これらはいずれも、現行の横笛類との関係を明確に判断できない笛である。寂光院の笛と清涼寺の笛はどちらも六孔であったが、表の六例のうち、三孔の④以外の笛は、六孔である可能性を持つ。以下、それぞれの笛を寂光院の笛と比べてみよう。

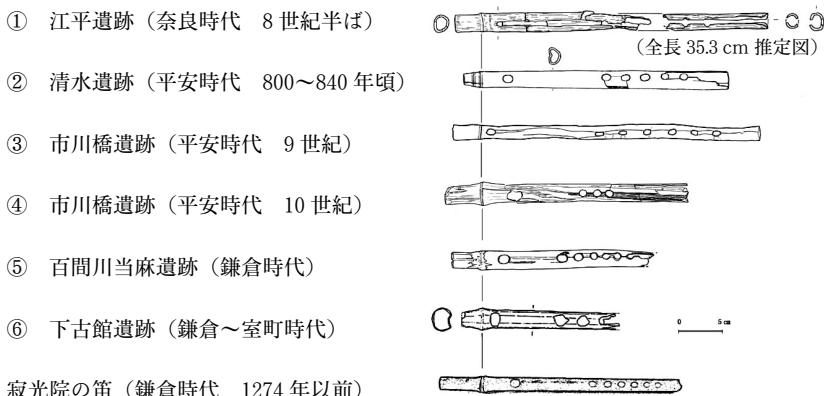


表5 古代および中世の遺跡から出土した竹製の横笛

	遺 跡 名	時 期	指 孔 数	全長（残存長）
①	江平遺跡（福島県石川郡）	奈良時代 (8世紀半ば)	残存 5	残存 22.1 cm（管頭部） 残存 11.8 cm（管尻部）
②	清水遺跡（宮城県名取市）	平安時代 (800～840 年頃)	残存 5	残存 30.0cm
③	市川橋遺跡（宮城県多賀城市）	平安時代(9 世紀)	6	34.8cm
④	市川橋遺跡（宮城県多賀城市）	平安時代(10 世紀)	3	27.6cm
⑤	百間川当麻遺跡（岡山県岡山市）	鎌倉時代	残存 6 または 7	残存 22.8cm
⑥	下古館遺跡（栃木県国分寺町）	鎌倉～室町時代	残存 3	残存 17.9cm

①（江平遺跡）は、天平十五年（七四三）の木簡と共伴したことから八世紀半ばに時代を特定でき、現時点では、出土した竹製横笛の最古例である。管頭部と管尻部が分離しており、しかも欠損部分もあるため、指孔や全長を確定することはできない。六孔と仮定すると、全長は三五・三センチ程度、その場合の音律（筒音 $a$ ・彎鏡）は神楽笛に近いと推定されている。五孔であった場合でも三三・一センチになり、寂光院の笛よりも大きい。②（清水遺跡。図29）は共伴した土器などから平安時代前半の笛と推定されている。管尻を欠くため指孔数を特定できないが、六孔の可能性が高い。三〇センチという残存長は寂光院の笛に近いが、管尻を補って推定すると、もう少し長かったと考えられるだろう。復元した楽器の音律（筒音 $d^{\sharp}$ ・断金）や指孔の間隔などから考えて、廃絶した東遊笛ではないかと推測されている<sup>⑬</sup>。③（市川橋遺跡・平成十四年度調査。図30）は、つぶれてはいるが、ほぼ完形で出土した。六孔である点は寂光院の笛と一致するが、全長が三四・八センチと長い。①と同様に歌口が節に接近しており、この点でも、寂光院の笛とは異なる。復元した笛から推定される音律（筒音 $b$ ・盤渉）および指孔の中心点は、神楽笛に近い<sup>⑭</sup>。④（市川橋遺跡・平成九年度調査。図31）の全長は二七・六センチであり、寂光院の笛（残存長 二七・四センチ）と数値的に近い。径は寂光院の笛よりも太い。三孔である点は異なるが、指孔の間隔はよく似ている。雄竹を用いていると思われ、節部分の筋がはっきり見える点も似ている。⑤（百間川当麻遺跡）も、寂光院の笛と似ている。残存長は二二・八センチ

図 32 出土した竹製の笛と寂光院の笛との比較図



であるが、管端部の欠損部分を補えば、よく似た全長を示す可能性がある。管尻が欠損するので指孔数を明確にできないが、六または七と思われる。歌口と第一指孔との間隔は寂光院の笛よりも狭いが、指孔の間隔はよく似ている。残念ながら、この笛は激しい劣化により廃棄されてしまい、現在は実物を見ることができない。時代的には鎌倉時代の井戸から出土しており、寂光院の笛とほぼ同時代の笛である。⑥（下古館遺跡）は鎌倉から室町時代の遺物である。歌口と三指孔を含む一七・九センチしか残存していない。径や指孔も含め、寂光院の笛よりも大きい笛であったと思われる。

以上六例の出土した笛（計測図<sup>20</sup>）と寂光院の笛（写真から抽出した輪郭図）を、図32に比較してみる。歌口から第一指孔までの距離は違うが、④と⑤の指孔の間隔が寂光院の笛と似ていることを見てとれる。ただし、これら二例には榿巻や黒漆の塗布の報告はない。④と⑤は全長や指孔の上では寂光院の笛に近いが、指孔と指孔の間に黒漆が残っていた寂光院の笛とは違う外見であったのかもしれない。もっとも、出土遺物の場合には、長期の埋蔵による劣化、発掘時や保存処理時の収縮などのために、本来の楽器の姿をつかみにくい面がある。仮に黒漆が塗られていたとしても、出土時に読み取るのはむずかしいだろう。

このように、出土した竹製の横笛には、同じ楽器であると言え

ないものの、寂光院の笛に類似した例を指摘できる。出土遺物の笛は実用であったと考えられるので、胎内に納入されていた寂光院および清涼寺の笛についても、ミニチュアではなく実用品であった可能性を推定できよう。

## まとめ

最後に、仏像胎内に納入された鎌倉時代の笛三点を含めて、現時点で把握できる横笛の形態的変遷について、まとめておこう。

横笛の現存最古例は、正倉院に所蔵されている七孔の四管である。竹製二管、石製一管、牙製一管と材質の異なる四管であり、全長やプロポーションもそれぞれ違う。しかし、これらには共通して、現行の雅楽の横笛とは違う次の特徴が見られる。

- ア 歌口や指孔部分の谷ぐりがない
- イ 管内に下地漆を塗っていない
- ウ 樺巻が見られない
- エ 節部分の小枝を残している
- オ 指孔が小さい
- カ 筒音と「六」がオクターブ関係である

これらの特徴は、時代的な変遷の中で、徐々に変わっていった。その一方、正倉院の例とは違うタイプの笛も様々なに作られたと考えられる。

現時点で、正倉院の笛に年代的に続くのは、表5に示した①から④の出土遺物である。大きさや指孔数は様々であ

る。出土遺物であるために右記の特徴の有無を明確にするのはむずかしいが、いずれも小枝を除去しているので、エの特徴はない。小枝は楽器を演奏する際の邪魔になるであろうから、古くから切り取る例があったと考える。

次に古い年代を特定できるのが、仏像の胎内に納入されていた寂光院と清涼寺の六孔の笛である。全長が短く、指孔の間隔が狭いという特徴を持ち、これは出土した横笛にも似た例があった。正倉院の笛とは指孔数が異なるが、ア・イ・オの特徴は同じである。ウについては、樺や麻糸などを巻きつける際の下地（接着材）と思われる黒漆が指孔間に残されていたので、異なる。エについても、正倉院の笛とは違う。鎌倉時代には、現行とは違うタイプの横笛も吹奏されていたと言える。

同じく鎌倉時代に制作されたのが安国寺の笛である。七孔の龍笛であるが、正倉院の笛に共通する特徴（ア・イ）がある。一方で、現行の龍笛に共通する特徴（全長、指孔の大きさ、指孔の間隔、筒音と「六」が一オクターブ関係ではない）もある。さらに、現行の龍笛とは違う特徴も見られた。セミが小枝を除去したままの状態であり、現在のような樺巻ではなく、麻糸を巻いて黒漆で塗る製法を用いていた。下地の経木も見られない。こうした製法は、他の笛にも類例があり、安国寺の笛独自のものではない。鎌倉時代には、龍笛についても、現在とは異なる様々なタイプのものがあったと考えられる。

冒頭で述べたように、笛の制作年代の特定は難しく、その形態の変遷についても捉えにくい状況がある。その意味で、本稿で取り上げた仏像の胎内に納入された鎌倉時代の横笛は、制作年代を限定できる笛として、資料的価値は高い。安国寺の笛の例からは、きちんと樺を巻き、別材でセミを整形する製法が定着した時期を、もう少し後の時代に推定できる可能性が高くなった。寂光院や清涼寺の例からは、現行にはない笛の存在が明らかになった。胎内に納入された横笛の例が今後も増える可能性はあるのか、平安時代や室町時代の仏像にも同じような例があるのか、なぜ胎内に納入された楽器は横笛なのかなど、問題もいろいろ残されている。今回の三例の調査をもとに、多くの楽器例を

検討することによって、さらに、横笛の形態変遷史を考察していきたいと思っている。

本稿の執筆にあたっては、多くの方からご教示をたまわった。彦根城博物館の齋藤望氏には資料の所在をはじめとして、貴重な示唆をいただいた。高橋美都氏には、貴重な音源を提供していただいた。小松大秀氏（東京国立博物館学芸課）、檀上浩二氏（福山市鞆の浦歴史民俗資料館）、石川登志雄氏（京都府教育庁指導部文化財保護課）、千葉孝弥氏（多賀城市埋蔵文化財調査センター）には、調査にあたって便宜をはかっていただいた。田中敏長氏、大橋彩子氏には、調査に同行していただき、横笛の製法についてご教示をいただいた。記して、深謝申し上げたい。

# 注

- (1) 特別展『港町鞆の寺院―その二 臨済宗寺院』（福山市鞆の浦歴史民俗資料館、平成十三年十月）のパンフレット。
- (2) 田辺三郎助「像内納入品Ⅰ」（文化庁監修『重要文化財 別巻Ⅰ』、毎日新聞社、昭和五三年）、同「像内納入品Ⅱ」（文化庁監修『重要文化財 別巻Ⅱ』、毎日新聞社、昭和五三年）。
- (3) 田中敏長・大橋彩子「安国寺蔵阿弥陀如来像胎内納入品横笛について」（『資料館だより』第三号、福山市鞆の浦歴史民俗資料館、平成十六年二月）。
- (4) 押田良久『雅楽鑑賞』（文憲堂七星社、昭和四四年）五三ページ。
- (5) 文永七く元享二年（一二七〇く一二三二）に撰述。『日本古典全集』（日本古典全集刊行会、昭和十四年）を参照。『続教訓抄』からの引用部分は以下同じ。
- (6) 齋藤望・渡辺恒一「資料翻刻『楽器類留』上」（『彦根城博物館 研究紀要』第七号、平成八年十二月）、一二五ページ。
- (7) 引用は『源平盛衰記』（三）（三弥井書店、平成六年）によった。
- (8) 『正倉院の楽器』（日本経済新聞社、昭和四二年）六一ページ。
- (9) 本稿では、管頭に近い指孔を第一指孔とする。
- (10) 呉竹製横笛（南倉）は、節から管尻までの中間点から第一指孔が若干ずれている。

- (11) 彫石横笛（北倉）は、歌口中央から管尻までの中間点から第二指孔が若干ずれている。
- (12) 遠藤徹「大神流笛譜考」（上野学園日本音楽資料室研究年報『日本音楽史研究』一号、平成八年）六四ページ。十三世紀末から十四世紀に成立した龍笛譜では、「六」とオクターブ関係の筒音を区別して表記してある。
- (13) 奥健夫「清涼寺・寂光院の地藏菩薩像と『五境の良葉』―像内納入品論のために―」（『佛教藝術』二三四号、平成九年九月）。論文では歌口と指孔の数を合わせて「七孔」と紹介。
- (14) 『日本美術院彫刻等修理記録』Ⅳ（奈良国立文化財研究所、昭和五四年）に写真と説明（修理図解説書）がある。
- (15) 竹製ではない笛の例に、古墳時代後期の奈良県天理市星塚一号墳から出土した遺物がある。材は松。中央に歌口のある独自の形態の笛と推測されている。また、近世の笛としては、石守晃氏からのご教示によれば、群馬県東長岡戸井口遺跡の井戸跡から、篠竹製の笛（歌口と二指孔が残存）が出土している。
- (16) 山田光洋「古代・中世の出土竹笛をめぐって」（第三回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会東日本支部合同例会口頭発表、平成十五年十二月十三日）では、横笛と縦笛の出土例に関する詳細な発表があった。
- (17) 田中敏長・森幸彦・大橋彩子「福島県玉川村江平遺跡出土横笛の復原研究」（福島県文化財センター白河館『研究紀要二〇〇二』、平成十五年三月）。
- (18) 美濃晋平・田中敏長『『清水の笛』仮称 宮城県名取市清水遺跡より出土した竹製横笛について』第三二五回東洋音楽学会研究発表、昭和六二年六月六日。黄鐘を430 Hzとした場合の断金と推定している。前掲の田中・森・大橋氏の論文（一二三ページ）では、筒音297 Hzと推定する。
- (19) 田中敏長・大橋彩子「市川橋遺跡出土横笛について」（<http://www.asahi-net.or.jp/~dls-ymgc>）
- (20) 前掲の山田光洋氏の発表で配布された資料を参照した。①から⑥の各笛に関する報告書は下記の通り。①福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・福島県土木部『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告Ⅻ 江平遺跡』（福島県文化財調査報告書第三九四集、平成十四年）、②宮城県文化財保護協会『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』（宮城県文化財調査報告書第七七集、昭和五六年）、③多賀城市教育委員会・多賀城市城南地区区画整理組合『市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市文化財調査報告書第七十集、平成十五年）、④宮城県教育委員会・宮城県土木部『市川橋遺跡の調査―県道「泉―塩釜線」関連調査報告書Ⅲ』（宮城県文化財調査報告書第一八四集、平成十三年）、⑤建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ 百間川沢田遺跡Ⅰ・百間

川長谷遺跡・百間川岩間遺跡・百間川当麻遺跡<sup>1</sup>』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告四六、昭和五六年）、⑥栃木県教育委員会・（財）栃木県文化財振興事業団『下古館遺跡―住宅・都市整備公団小山・栃木都市計画事業自治医科大学周辺埋蔵文化財発掘調査―』（栃木県埋蔵文化財調査報告第一六六集、平成七年）

（21） 尺八への樺卷は、正倉院所蔵楽器に例がある。『源氏物語絵巻』（十二世紀前半の制作か）の「鈴虫」には、指孔間を黒く塗った横笛が描かれているが、これが樺を巻いていたのか、黒漆だけだったのかは不明である。

[Summary]

## Japanese Flutes Manufactured in the Kamakura Period

— Three Examples Found inside  
the Body of Buddha Statues —

TAKAKUWA Izumi  
NOGAWA Mihoko

In 1949 a Japanese flute with seven holes was found inside the body of a statue of Amida, which was manufactured in 1274, at Ankokuji in Tomonoura, Hiroshima prefecture. This flute seems to have been made since in the first half of the Kamakura period. Although differences in the method of manufacture can be seen, there are other *ryuteki* flutes made in a similar way in the collections of the Tokyo National Museum and Hikone Castle Museum. For this reason, it appears that such a method of manufacture was by no means special during the Kamakura period. An examination of the pitch revealed that this flute was played at a pitch approximately the same as that of today's *ryuteki*. Although *ryuteki* is an instrument whose date of manufacture is difficult to determine, the discovery of this particular flute will serve as a standard for future examination of wind instruments.

In 1986, a Japanese flute with six holes was found inside the body of a statue of Jizo, the principal image of Jakko-in in Kyoto prefecture. Since the statue itself was made in 1299, it is assumed that this flute was also made in the first half of the Kamakura period. Today, there are also flutes with six holes, namely *kagurabue* and *komabue*. However, the flute found at Jakko-in is much smaller than today's flutes and its pitch is higher. Another six-holed flute of similar size as that of Jakko-in was also found inside the body of a statue of Jizo (1221) at Seiryoji. Since it has been said



that old *komabue* was smaller than today's *komabue*, these two examples may be interpreted as old *komabue* or *kagurabue*. However, another interpretation is that they were intentionally made smaller to fit inside the body of a statue.

Of the two interpretations mentioned above, the former seems more probable when several examples of small flutes excavated from historic sites throughout Japan are considered. Although the number and position of their holes differ, their size is similar to that of the flute found at Jakko-in. Among such excavated flutes the one excavated from Toma Site at Hyakkengawa in Okayama prefecture, in particular, is similar in size. Moreover, the site itself can be dated to the Kamakura period. Thus, it may be said that during the Kamakura period small flutes that are not known today were played.